埼玉大学紀要 教育学部，73(1)：187－205 (2024)

働く／書く娘たちの自伝
――メイドとモダン・ガールの職業作家への道――

武田ちあき　　埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：メイド、モダン・ガール、自伝、職業作家、第１次世界大戦、第２次世界大戦

１．序

イギリスは伝記のジャンルが盛んな国である。個人の記録は国家の記録であり、個人の歴史は国家の歴史の構成要素とされる。そうしたイデオロギーの下、19 世紀以降、『オックスフォード英国人名辞典』(*Oxford Dictionary of National Biography,* 1885-)、『ケンブリッジ人名百科事典』(*The Cambridge Biographical Encyclopedia*,1994)など各種の人名辞典が編纂されて国民の文化遺産となり、書店の棚にも、書評誌の欄でも、伝記・自伝は人気ジャンルとして一定のスペースを安定的に確保している。

そのような伝統を誇る英国伝記文学の銀河において、数々の綺羅星の明るさには及びもつかないながら、独自のほのかな光を放ち、心をとらえてやまない糠星がある。それが、メイドの自伝である。

新井(2014)も言い切るように、「使用人の回顧録はそう多くない」(355)。その理由は、使用人階級の教育水準と、職業倫理としての守秘義務にある。しかし、そうした制約を克服して形を成した、ごく少数のメイドの自伝はいずれも、辛いながらも堅実な生活の醸す不思議な安定感、日々積み重ねられ、一生を通じて貫かれる忍耐が呼ぶ静かな感動、人生の現実に向けられるまなざしにたゆたうユーモアに湧く親しみで、読者の心に忘れがたい印象を残す。恵まれない境遇にあって、女の人が誠実に自分の道を見つけようとすることの尊さ、そして、地味な暮らしをきちんと積み上げ、それを書くことで持てる、ささやかでも確かな誇りは、読者の胸を強く打つ。

どうすれば、厳しい毎日を耐え抜くことができるのか。前を向く気力は、どこから出るのか。ひたむきに働くこと／書くことで、彼女らが成し遂げていたものは何なのか。

さらに、書くということで身を立てるに至る、いわば例外的なメイドである彼女たちの生活・人生のどこに、普通なら見当たりそうもない突破口があったのか。

絶えざる嘆賞に値する「メイドの自伝」が成立するに至る過程への、こうした疑問を、本稿では、まず各人の素質・環境・人生における出来事に着目して読み解くとともに、書く契機として機能したと思われる社会の変化の諸相を考察し整理したい。

そこにリンクしてくるのが、もうひとつの珍しい自伝のサブジャンル、「モダン・ガールの自伝」である。1920 年代ジャズ・エイジのフラッパー、遊び人の尻軽女、というイメージの強いモダン・ガールは、およそ内省的な自伝とは真逆の存在に見えるが、「書く」ことで女性の自立を果たす、その道程には、階級こそ違えども、メイドたちと一致する点が多々、見出されるのだ。

なにより、本稿でとりあげるメイドとモダン・ガールの自伝が執筆ないし出版された時期は、すべて彼女たちの 60 代以降である、という奇妙な符合は、とくに注目に値する（Table 1 参照）。老境の回顧録という形で彼女たちがヴィクトリア朝後期から 20 世紀前半の自分と英国の過去に注ぐ、その共通の視線の先には、家事、女性の自立、戦争――この三つが絡む、思わぬ大きなス

ケールの歴史の局面が開けていることを、本稿では明らかにしたい。

Table 1　Autobiographies of Maids and Modern Girls

著者／口述者	生没年	書名	出版年	舞台	生誕地	出版／口述年齢	没年齢
Winifred Grace	1899- ?	*Winifred: A Wiltshire Working Girl*	1991	1900s-20s	Wiltshire	90	95-?
Margaret Powell	1907-84	*Below Stairs: The Bestselling Memoirs of a 1920s Kitchen Maid*	1968	1920s	Sussex	61	77
Rosina Harrison	1899-1989	*The Lady's Maid: My Life in Service*	1975	1920s-50s	Yorkshire	76	90
Flora Thompson	1876-1947	*Lark Rise*	1939	1880s	Oxfordshire	63	71
		Over to Candleford	1941	1880s-90s		65	
		Candleford Green	1943	1890s		67	
Noel Streatfeild	1895-1986	*A Vicarage Family*	1963	1910s	Sussex	68	91
		Away from the Vicarage	1965	1920s		70	
		Beyond the Vicarage	1971	1930s-40s		76	

２．メイドの自伝

2-1 ウィニフレッド・グレース

シルヴィア・マーロウ(Sylvia Marlow)著『イギリスのある女中の生涯』(*Winifred: A Wiltshire Working Girl*, 1991)は、インタビューアーが聞き書きによって構成した「メイドの自伝」である。プロの物書きの介入・参与による「自伝」としては、第 1 次大戦を戦った兵士の最後の生存者、ハリー・パッチ(Harry Patch)の自伝(2007)と同様の形式である。

口述筆記の形態が採られた直接の理由は、90 歳という本人の高齢である。ハリーも取材当時 108 歳で、一般の長寿男性としても世界第 3 位。かれら歴史の生き証人の存命中に体験談を採録し、その人生を史実として残したい、という切迫した――一刻を争うかもしれない――需要が、「他者の筆による自伝」の成立した最大の理由である。

111 歳で逝去した際には全英が弔意を表した国民的英雄ハリーの知名度には及ぶべくもないものの、没年すら現在不詳の、この無名のメイドも、むしろ無名だからこそ、発掘する意義はなおさら大きくなる。

ここに関与してくる学問的背景として､20 世紀後半のカルチュラル･スタディーズ（文化研究）とニュー・ヒストリシズム（新歴史主義）の登場がある。言語論的転回に端を発する言語観・歴史観のパラダイム・シフトは、それまで埋もれていた市井の庶民の生活史・文化史の意義をクローズアップする。これにポスト・コロニアリズム（脱植民地主義）が加わって、たとえばロンドン博物館(Museum of London)は 1980 年代以降、オーラル・ヒストリー・プロジェクトを大々的に展開し、多様な人種・民族・職業にわたる市民のライフ・ストーリーを収集。その 5,000 時間を越える録音コレクションは、1993 年 11 月～1994 年 5 月開催の「ロンドン市民の形成」(“The Peopling of London”)展でも目玉のひとつとして音声で公開されている。

このように「声なき人々に声を与える」大きな流れの中で、メイドはその格好の対象となる。

村上(2011)が指摘するように、メイド人口は世紀転換期、イングランドとウェールズ合わせて約130 万人で、職業を持つ女性の最大多数を占め、3 人に 1 人は家事使用人だった(6)。それでいて使用人は、階上(upstairs)に住む雇用主の家族の目に触れてはならないとされ、裏階段を使うなど、階下(downstairs)の世界に閉じ込められていた。すなわちメイドは、かくも大量かつ不可視の存在として、その声を抑圧され圧殺されてきたのである。

メイドの声を聴取したものには、村上も紹介する英国中部地方のレスターシャー博物館による口述記録集『キャップとエプロン』(*Cap and Apron: An Oral History of Domestic Service in the Shires, 1880-1950*, 1986)などがある。こうした趨勢において歴史研究者のマーロウは、ひとりのメイドの声を個人史に構築しているのである。

上述の服務規範に照らせば、メイドが自分の姿を晒さないよう努めるのは、ごく自然な習慣であり、メイドが自分で自伝を書かないのは、メイド魂の粋ですらある。そうした中でマーロウが目を留めたのは、いかにもメイドらしい自己顕示欲のなさゆえに自伝執筆の意図など皆無ながら、その驚嘆すべき豊富な記憶力でおのずと地方に令名を馳せていたウィニフレッド・グレース夫人(Winifred Grace, 1899-?)である。

原題『ウィニフレッド――ウィルトシャー州のワーキング・クラスの少女』は、3 連続の[w]音の頭韻がポップな印象を与えるが、内容的には相当にエッジが効いたタイトルである。

まずウィルトシャー州は、同書の訳者である徳岡(1994)が注記するように「英国の中でも最も低賃金の土地として知られていた」(122)。ウェイツ(1993)も、同州の古来の定評として「地表で最も労働を搾取されている民(“the worst used labouring people on the face of the earth”)」(54)というフレーズを挙げている。つまりこれは、メイドとしての労働条件が最も過酷な場所であることを意味する。

そして主人公のウィニフレッドは、労働者階級の一介の少女でありながら、その旺盛な向学心と高潔な倫理観は、所属階級に通常期待される水準を遥かに凌駕する、稀有の知性と人格の持ち主だったのである。その高邁な精神は、次の声に響いている。

> 私は、何の目的もなく生きるのが嫌でした。何かをし、何かを作り、読み、世の中の仕組みを知り、いろんなことがなぜそのようになっているのかを学び、歴史を勉強したかった。いや、何よりも音楽を習い、ピアノを弾けるようになりたかったのです。(13, 49)

貧しい牛飼いの 12 番目の子として生まれた彼女を、お屋敷の奥様は養女にと所望するが、母は断る。

> 私はいつも、なぜ養女に出してくれなかったのと母に恨み言を言い続けました。お屋敷の子になっていたら、どんなに良かったでしょう。立派な教育を受け、ピアノも弾けるし、いろんな面白いことを学べたでしょう。旅行にも行けたでしょう。(18)

家にある本といえば聖書一冊きり、という環境で、しかしウィニフレッドの知識欲は止まない。

> 私が六歳になったときには、姉たちは全員、女中奉公に出てしまっていました‥‥辛い、厳しい女中の生活が当然だと思っていたのです。もっとマシな人生を送りたいと考えた私は、たった一人の例外だったといえるでしょう。(57)

「ワーキング・クラスの例外」と自覚するウィニフレッドは、姉たちが 12 歳か 13 歳で女中として雇われていった中で、自分だけは 14 歳まで学校に行かせてもらう。女中となってからも、お屋敷の子どもたちの付き添いで家庭教師の授業に同席し、英語のアクセントはウィルトシャー弁から正しい標準語のオックスフォード・イングリッシュに変わり、会話レベルのフランス語までマスターする。その知性は、日々の労働に埋没することなく、女中奉公の教育的意義を洞察する、メタ認知的な見解にも結実している。

> きつい生活でした。でも、あの女中奉公からいろんなことを学びましたね。家事全般、たとえば家というものをどう運営していけばいいかを学びました。すべてのことをチャンと時間どおり、定められたようにやる。そういうことに慣れると、生活全体がしっかりしてくるのです。‥‥一種の教育なんです。女中をした者は、いい主婦になります。少なくともよく働くことだけは間違いありません。(129)

女中奉公にマネージメント能力と勤勉さの獲得を意識し自覚する視点は、同業の娘たちには普通見られない、突出した教養を感じさせる。

また、同僚の娘たちが戦時中の混乱で身を持ち崩す例も多い中、婚約者にも体に触れさせないほどのウィニフレッドの貞操観念の堅固さは、特筆に値する。

この「人として、あるべき姿」を守り抜く生き方は、退職後の活発な社会活動にも貫かれる。近隣の住民の相談に乗るだけでなく、国内問題・国際問題に関心を持ち、ホームレスの処遇や、子ども・動物の虐待について、地元の国会議員に手紙を書いたり、当局に投書をしたり。世の不正を見逃さない強い正義感と盛んな筆力を兼ね備えた「グレース夫人」は、コミュニティのインフルエンサーとしての地位を確立するのであり、その老境は、元メイドが、アマチュアながらも「物書き」に至る道をつけたもの、として見ることができよう。

ウィニフレッドの社会的な意識の高さは、若い頃の「兵隊好き」に、すでに表れている。「男に生まれていたら立派な軍人になったのに」(88-89)と残念がる彼女は、婚約者が戦死し、夫が後年戦争神経症を発症しても、自分の母のようには戦争や兵隊を忌避しない。そこには、国家を維持していく制度としての軍隊への理解、国民としての責任感が見受けられる。

厳格な母の抑圧に屈せず、反骨精神を持ち続けた彼女は、戦後、多くの女性が女中に戻ることを拒否し、もっと独立した職を選んだ時も、母を反面教師として「娘と娘の幸福のあいだに立ち塞がるようなことはするまいと決心」(179)する。新しい時代の波、そして女性の自立の流れを見定め、見越して、変化に対応してきた、この一老女の回想録は、「メイド」の慎ましい殻の中に、どれほどの尊い、自由な魂が宿り得るかを、感動的に伝えているのである。

2-2 マーガレット・パウエル

元メイドが職業作家として出版した最初の自伝は、マーガレット・パウエル(Margaret Powell)著『英国メイド　マーガレットの回想』(*Below Stairs: The Bestselling Memoirs of a 1920s Kitchen Maid*, 1968)である。

家事使用人の中でも「下の下(the lowest of the low)」と見下されるキッチンメイド（台所女中）から身を起こし、不屈の根性と才覚でコック（料理人）に出世したマーガレットは、引退後、50 代になってオックスフォード大学の公開講座と夜間授業を受講し、討論のクラスで BBC のプロ

デューサーに見出され、ラジオ番組に出演したのをきっかけに、61 歳で上掲の自伝を刊行して、一躍ベストセラー作家となる。回想録、旅行記、小説、料理書など多彩なジャンルで多数の著書を出し、テレビのコメンテーターとしても活躍した人物である。

テレビドラマ『階上・階下』(*Upstairs, Downstairs*, 1971)以降、映画『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1993)、映画『ゴスフォード・パーク』(*Gosford Park*, 2001)、テレビドラマ『ダウントン・アビー』(*Downton Abbey*, 2010)など、現在でも花盛りの「お屋敷もの」ジャンルは、版を重ねてロングセラーとなった、マーガレットの出世作に触発されたことから確立したものであり、このメイドの自伝の影響力は、英国のみならず世界のマスメディアに広く及んでいるのである。

後半生になってマーガレットが知的に頭角を現したのは、歴史や天文学を論じフランス語を話す息子たちの会話についていきたい、という母親としての思いに端を発していた。息子たちがグラマー・スクールに通い、大学入学の準備をしていたということ自体、元メイドの家庭としては階級的に異例であり、マーガレットの教育に対する意識のただならぬ高さをしのばせる。（実際、彼女は 58 歳で大学入学資格試験の O レベルに合格し、「60 歳前に A レベル合格」という目標も立てる。）その縁で、彼女は、息子の歴史の教師の紹介で、大学の歴史の授業を受け、やがて自分の歴史を執筆して世に出すに至るのだ。

そして、マーガレットの学問的な素養は、じつは幼少時から長年の読書によって培われてきたものだった。少女時代には無料図書館をフル活用。メイド時代にも、他のメイドたちと同じく『ペグズ・ペーパー』、『レッド・サークル・マガジン』などの女性雑誌は愛読していたが、奉公先の奥様から借りて読んだ本が、なんと、ディケンズ、コンラッド、ヘンティ、O・ヘンリー、G・K・チェスタトン、それにギボンの『ローマ帝国衰亡史』。このリストの格調高さは、はるかにメイド離れした、真正の文学愛好者ならではのもの。メイドの休日にも、疲れていて映画館と本屋しか行けなかったものの、「カーライル、ウェルズ、ディケンズみたいな文人の旧家を訪ねて回れたら‥‥どんなに素晴らしいだろう」(113)と夢見るほど、「歴史と読書が大好物だった」(113)のである。

また、作家としての素質も、早くからその片鱗が見られた。学校時代には先生に「特技があるのを知っていますよ。おもしろいお話が上手でしょう。」(33)と評価され、コック時代も「ただひとつ得意だったのはお話をすることだった」(155)とおしゃべり上手を自任。「私はしゃべるのが好きだし、人が好きだし」(168)と、人間的興味の旺盛さを、しっかり自覚していたのである。

それゆえ、マーガレットの自伝には、文学としての魅力と個性が光っている。

ひとつには「訳者あとがき」で村上も指摘する、ユーモアとサービス精神。たとえば「映画館で隣から私を小突いてくる人といったら、必ずといっていいほど、『フランケンシュタイン』の怪物みたいな顔と、農園みたいなゆるいモラルのあわせ技なのだ」(154) 。「二人の女の子が一緒に行動しているときは、片方がもう片方より可愛いのが普通だと思うけど、オリーブと私の場合もそうだった。彼女は私よりもずっと可愛かった。そして二人組の男の子を見つけたら、やっぱりだいたいひとりはハンサムで、もうひとりはバスの後ろみたいな顔をしている。これは自然の摂理がつりあいをとろうとしている結果なんじゃないかと思う」(157)。いずれも、若い男をこき下ろす舌鋒の冴えに自虐が重なって、バランスのとれた絶妙な笑いを醸す。

また、鋭い洞察を示す、巧みな表現も光る。「私たちのふだんの平静な表情や、礼儀正しい態度の下には、軽蔑と冷笑が隠されていた」(108)。「私は奥様を十二回くらいしか見たことがなく、もっといえば、彼女のほうは私を見ていなかった気がする。だって、彼女は私を突き抜けたその後ろを見ているみたいだったもの」(119)。奥様の視線の先、使用人の仮面の下。見えないところ

にある本質に届く、研ぎ澄まされた繊細な感性が、お屋敷の人間の関係性を可視化してみせるのだ。

なにより、さすがディケンズ好き、とうならされる、プロフェッショナルとしての雄弁で巧みな語り口。大柄で酒好きで気さく、というメイン・キャラクターとしての陽気な人なつこさ。娯楽性豊かな物語を展開するマーガレットは、前項のストイックなウィニフレッドと対照的であり、そこには作家および主人公としての自覚の有無が、大きく関与しているといえよう。

とはいえ、ウィニフレッドとマーガレットには、メイドとしての社会的な意識に大きな共通点がある。階級制への反発、社会の不公正への義憤を、投書であれ作品であれ、文章で表現し、世に訴える行動力。秘匿されてきたお屋敷社会の闇の中から声を上げたパイオニア。たぐいまれな正義感と教養を武器にした、あっぱれなメイドたちとして、ふたりは相並ぶ。

その上で、回想録に関しては、いわば発掘された形のウィニフレッドと違い、みずから筆を執るという未知の領域に乗り出したマーガレット。その動因は、何だったのか。その謎を解く糸口は、メイドの仕事についての、ふたりの職業観の相違にある。

ウィニフレッドが、使用人生活で身につけたことは結婚して家庭を持つときに役に立つ、と考えていたのに対し、マーガレットの意見は真逆。「私が使用人生活を去るときに持ち帰った‥‥七コース構成の手の込んだディナーを作れる知識‥‥が、結婚生活に役立つ手土産になったとは言い切れない」(214)のは、夫の収入ではろくな料理は作れず、また、粗食に慣れた夫には、洒落た料理は喜ばれなかったからである。「技術というのはわかる人がいて初めて成り立つもの」(214)と喝破する彼女は、環境が変わると物事の有用性も変わる、という別の真実を察知する。そして、メイド生活とは全く異なる方面に目を転じ、「『友達をたくさんつくって、他人に影響を与える』という野心」(215)を追いはじめるのである。

それでもマーガレットの使用人生活はその後の人生に無益ではなく、思わぬ形で、職業作家への道を後押ししている。キッチンメイドに就職した時点で、彼女は仕事に必要な知識と技術を体得するのに大変な苦労をする。それは彼女が無知や無能だったからではなく、研修体制が皆無だったからである。

大英帝国があれほどの威容を、その階層構造の上に構築していたことを思うと、マーガレットが見よう見まねで、失敗だらけで、試行錯誤を重ねていたのは、不思議に見える。しかし同時に、19 世紀ヴィクトリア朝の英国社会はダーウィニズムに支配された生存闘争の競争社会でもあり、個人の知識や技術は門外不出の秘密であって、身につけるには盗み取るしかないものでもあった。

そんな状況でコックへの出世を志した彼女は、周囲の助けがないことにもへこたれず、わからないことがたくさんあってもくじけず、自分にできることを工夫しては精一杯アピールして、見事にその職を得る。人にお膳立てしてもらう経験値の低さが、逆に功を奏し、未知の領域を開拓する上でのひるまぬ勇敢さと打たれ強さとなって、自伝執筆の扉を開いたものといえよう。

労働者階級の女性の最大多数が戦後メイドから別の職業に移っていく中で、それを応援しつつも傍観するウィニフレッドより一歩進んだ形で、マーガレットはみずからポスト・メイドの女性の職業開拓と自立を実演してみせている。そして、その豊かな文学性によって、自分が乗り越えてきた過去のメイドの世界のドラマをも作品に定着し、「メイドもの」・「執事もの」・「お屋敷もの」など多くのジャンルに、インスピレーションを与え続けているのである。

2-3 ロジーナ・ハリソン

ロジーナ・ハリソン(Rosina Harrison)著『おだまり、ローズ――子爵夫人付きメイドの回想』

(*The Lady's Maid: My Life in Service*, 1975)は、メイドの自伝でありながら、その女主人たる英国最初の女性国会議員の伝記でもあり、20 世紀前半の英国の時代の肖像でもある、というスケールの大きな著作である。

著者ロジーナは、もともと旅行がしたいためにメイドの職業を選んだ、知的好奇心の旺盛な人物で、そのジャーナリスト的な視点は次作のインタビュー集『わたしはこうして執事になった』(*Gentlemen's Gentlemen: From Boot Boys to Butlers, True Stories of Life below Stairs*. 1976)にも生かされている。

本書の読みどころは、邦訳のタイトルにもうかがわれるように、お付きのメイドと奥様の、日々の、そして長年の、バトルである。丁々発止のやりとりが漫才のような笑いを醸すこともあるが、往々にしてそれは、息を呑むような緊迫した対立に発展する。

なにしろ奥様の子爵夫人レディ・アスター(Lady Astor, 1879-1964)は、マーガレット・ミッチェル(Margaret Mitchell, 1900-49)の小説『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*, 1936)のヒロイン、スカーレット・オハラと同様、アイルランドの血を引くアメリカの南部娘。印象派の画家サージェント(John Singer Sargent, 1856-1925)の名画「ナンシー・アスターの肖像」(“Portrait of Nancy Astor,” 1909)で有名な絶世の美女[1]ながら、奔放でわがままで気まぐれ、意固地・意地悪・意地っ張りで、気の強さと口の悪さは天下一品。

一方、お付きメイド、愛称ローズは、一般的な英国人が優雅な大人のマナーとして好む控えめな物言い(understatement)とは対極の、直截な物言い(bluntness)をお国自慢にする、ヨークシャー州[2]の出身。そのヨークシャーの気質と訛りを、悪びれず、ずけずけと、誇り高く、発揮する。

したがって、この自伝は全巻にわたって、ローズ vs.レディ・アスター、お付きメイド vs.女主人、ヨークシャー女 vs.アメリカ女の、個人と階級と土地が衝突し対決する、一大戦記なのである。きれいごとではすまない、生々しい攻防。両者の知恵比べ、政治的駆け引きは、奥様が登院する庶民院の議場に劣らない心理戦。時に奥様の仕打ちはパワハラや精神的 DV にまでエスカレートする。馴れ合いや腐れ縁や共依存などという生易しいものではない、むしろ宿敵同士の緊張関係。いずれ劣らぬ激しい気性をむき出しにしての、ふたりの女性の、火花散る真剣勝負と特異な絆を、ローズは潜入ルポよろしく赤裸々に、そして感動的に描出するのである。

「レディ（貴族）ではあっても、レディ（淑女）ではない」と噂された超・難物の奥様のお仕えが務まる「唯一無二のレディーズ・メイド（お付きメイド）」と評されたローズ。（原題の英語に定冠詞 the がついているのは、その意である。）いわばメイド職の頂点に登り詰めた彼女には、どんな教育的背景があったのか。

子どもの時から学ぶのが好きだった点では、ウィニフレッドやマーガレットと同じローズだが、特別に幸運だったのは、彼女の進路志望に全面的に協力してくれる母親に恵まれたことである。洗濯メイド[3]出身の母親は、ローズの希望する仕事が「旅行」だと知るや、その実現に向けて戦略を練り、長期的な計画を立てる。それは知識と経験に裏打ちされた、きわめて綿密で的確、かつ実際的で効果的な進路指導だった。その方針とアドバイスをまとめると、以下の 3 点になる。

1. 旅行をするなら、お付きメイドがいい。主人がどこへ行くにもお供をする召使だから。
2. お付きメイドになりたいなら、最初からお付きメイドとして奉公するのがいい。ひとまずハウスメイドや厨房メイドになって、働きながらお付きメイドをめざそうとしても、いったん何々メイドという色がついてしまったら、そこから抜け出せないから。
3. お付きメイドになるには、フランス語と婦人服の仕立て方を習う必要がある。教わることが

あるうちは、学校にも通い続ける必要がある。

このプランに基づいて、まずローズは、周囲の子が 14 歳で卒業する中、ひとりだけ 16 歳まで学校に通う。校長夫妻が個人教授をしてくれた「余分の二年間は、かけがえのないものだった」(15)と、その意義を自覚する。同時に、近くの町でフランス語の個人教授も受ける。卒業後は、町の大きな洋裁店に見習いに入り、鋭い観察力と積極的な質問で、5 年の見習い期間を 2 年で済ませてしまう。

いよいよ求職の時も、いきなり「奥様のお付きメイド」ではなく、「令嬢付きメイド」の求人から探そう、という母の提案で、ローズはスムーズにメイド・デビューを果たす。

レディ・アスターのお付きメイドになってからも、他の奥様方が引き抜きたがるほどローズが珍重されたのは、その裁縫の腕ゆえだった。パリ製の生地を服や下着に縫い上げる山のような仕事をこなす上に、ファッション・ショーで見たシャネルやランヴァンのデザインをアレンジして服を作り、既製服の買い付けにも抜群のセンスを発揮して、美しく気難しい奥様に重宝された。

このようにローズのメイドとしての成功は、マネージャーともプロデューサーともいえる敏腕な母親の教育の賜物であり、またローズ自身、その得難い機会を存分に生かす能力と気力と努力で、期待に応えた結果だった。ウィニフレッドの厳格な母親が、娘たちを旧来の社会の枠に縛り付けようとして自由を奪っていたのとは、まさに対照的である。

作家としてもローズは、当代随一の女性政治家の一番近くに常に控え、その最も個人的な内情に通じ、歴史が創られる現場の目撃者の位置にいた。その特権がローズの戦争体験談を、市井に生きたウィニフレッドやマーガレットとは異なる、英国社会の中枢における当事者意識あふれたものにしている。

第 2 次世界大戦当時、レディ・アスターの夫は、イギリス全土で最も激しい空爆を受けた都市、プリマスの市長。旦那様と奥様は、ともに国王夫妻の視察対応、空襲下の避難指揮、市街再建計画に奔走。ローズの仕事も「電話の応対、伝言の授受、電報の送信など‥‥秘書兼スポークスマンとしての雑務全般」(264)に拡大し、暗号もどきの自己流の速記まで考案。それがいかに市政と国政に貢献していたかは、市民の戦時業務を割り振る裁定委員会の面接で、「下院議員兼プリマス市長夫人としての奥様‥‥が万全の体調でお仕事に取り組める環境を整えるのが自分の仕事だと説明し、言葉を飾らずありのままに‥‥どんな形で奥様と旦那様のお役に立ってきたかを話し」(320)、戦争に協力するには、今のお付きメイドの仕事を続けるのが最も有益、と即時認められたことにも明らかである。普通だったら徴用を免除される見込みはなかったのに希望が通ったのは、「これまでにしたなかで最高の演説」(320)、「神がかりになっていた」(320)とローズ自身が確信するほどの、文学的な表現力のおかげでもあった。ここに、ローズの生涯における二つの職業、メイドと作家の、本質的な接点が見出せると言っていいだろう。

ローズによれば、開戦は奥様に「真価を示す機会」(271)、「英雄らしさを発揮する」(243)機会、「大衆のため、個々の人間のために何かをする機会を‥‥ご自分の行動がどんな成果を生んだかをその目で確かめる機会を」(243)与えたが、それはローズにも、また当時の女性たち全般にも、同じことが言えた。

「ものの役に立つ男性は、事実上だれもが徴兵されてしまっていた」(39)ために「使用人の世界では、ウーマン・リブが花盛り」(39)だった状況は、英国社会全体に及んでいた。戦時中のお屋敷における「人間関係の変化」(275)――使用人と雇い主の区別なく、一つの家族として、ともに戦い、死とまともに向かい合い、「あんな状況でなければ見る機会がなかったはずのいくつもの

美点を目にし、ほかのときならあらわにされるはずのなかったさまざまな感情を分かちあい‥‥いまや階級や生まれに負けない絆‥‥一体感」(275)を語るローズの洞察は、当時の社会の縮図であるとともに、その後の英国がたどる変化の予兆を示している。

戦争が女性の自立と階級社会の変容に及ぼした影響を、ローズはウィニフレッドやマーガレットよりも総括的に、かつ克明に、活写する。76 歳で刊行された自伝の、この驚くべき筆力には、ふたりのように結婚退職することなく、独身のまま人生の 45 年間をメイド職に捧げたローズの、「キャリアウーマン」(38)としての職業意識の強さが観取できる。

ローズの自伝が他にも増してひときわ輝いているのは、メイドから職業作家への長い道を貫く、職業人としての忍耐と見識、そして戦争の時代において女性の家事が国事に成した意味を、より明示的に前景化しているからなのである。

３．モダン・ガールの自伝

3-1 フローラ・トンプソン

上掲の、レアながらパワフルなメイドの自伝の存在は、後年やがて自伝を書く／語るに至るようなメイド――知性と文学的感性に富む、メイドらしくないメイド――が現実の職場に実在した証拠である。彼女たちが旧来のメイドの枠を超えていた部分とは、新たな時代の職業婦人の登場に道を開く、先進的な資質にほかならない。

自分で自分の進路を選択し、自分なりの人生の理想と職業倫理を持って職務に精励する、自立した姿勢。それは 20 世紀の前半、「新しい女」から「モダン・ガール」を経て、戦時中の社会を支えるに至る、英国女性の最先端の、模範的典型といえる。

そうした特質は、メイド以外の職種や階級で、やはり「物書き」になった女性たちにも共通しており、彼女たちの自伝の作風と軌跡を追うことは、女性の職業作家への道のありようを、より確かに、豊かに、把握することにつながると思われる。

そのようにメイド以外の業種で「働く娘」の書いた自伝のひとつに、元・郵便局員フローラ・トンプソン(Flora Thompson)の『ラークライズ』(*Lark Rise*, 1939)、『キャンドルフォードへ』(*Over to Candleford*, 1941)、『キャンドルフォード・グリーン』(*Candleford Green*, 1943)3 部作がある。1880～1890 年代の英国の村社会を舞台とするこの作品は、前項のメイドたちの描いた 20 世紀前半の激動が起こる前の、英国社会の原風景を記録した書であり、なにより、労働者階級の女性が職業作家として身を立てる嚆矢となった、先達の範でもある。

石田(2008)が紹介するように、とくに第 1 作『ラークライズ』は「イギリスの高校生の必読書」(400)とされ、長く読み継がれてきた古典的作品であるが、それは女性の自伝としてよりも、当時の生活を知る歴史資料としての側面が大きい。登場する地名は架空のもので、ジャンルとしてはフィクションに分類されるが、しかしそれが逆に、実在のモデルの土地を象徴化し、その風物を一般化して、国民の習俗の記録として普遍化する効果を出している。また人名も、作者フローラは主人公としての自分の名をローラ(Laura)に変えているが、それはより自由な人物造型を可能にするためではなく、その真逆で、むしろ自分の個性や存在感を極力抑えるための設定であるように見える。[4]

作家の企図が、自分の自伝ではなく、まず村の自伝にあることは、その構成に明らかである。原著では章題のみのところを、日本語版の訳者の石田がつけた小見出しは、作品の全容と作者の視点を的確に可視化している。すなわち、この邦訳の目次(2-5)は、ダーウィン(Charles Darwin,

1809-82)の『種の起源』*(The Origin of Species*, 1859)の目次(5-10)と酷似しているのである。1880年代の農村の社会・生活・産業・経済・気質・価値観について展開された総合的なパノラマは、村の博物誌を成している。全体を俯瞰する視点、百科事典的な網羅性、教科書的な一覧性、事実を集成し整理し編集して保存する意識は、まぎれもなく 19 世紀英国の博物学と歴史主義の枠組なのだ。[5]

ひとりの村娘が、このような驚嘆すべき知性と教養を身につけていたことには、いくつかの要因がある。父親は石工で、誇り高い職人。母親は貴族の子守女中の経験者。両親とも土着の農民ではなく、娘には高い教育を望み、家には本もあった。生活水準も政治意識も他の家よりは上だったローラ（フローラ）は、そのためにほかの子たちにやっかまれ、足を引っぱられ、もともとおとなしい性格がますます内向的になって、なおさら本の世界に入りこむ。それが功を奏して、学校では作文で賞を取り、教務補助に任じられる。そして、母親の女中時代の元・同僚である女性郵便局長の誘いで、よその町の郵便局の助手にスカウトされるに至る。当時は郵便局員の仕事は、牧師の娘や校長の娘など、良家の子女がするものとされており、この郵便局長自身が、世が世なら魔女狩りに遭っていただろうと噂されるほどの賢さで、階級以上の仕事をやってのけていた。ローラの就任は当初、分不相応として町の人々には歓迎されなかったが、やがて堅実な仕事ぶりで、抜擢されるだけのことはあると周囲に納得される。また、町に出たことで図書館が利用可能となり、シェイクスピア、ディケンズ、スコット、トロロープ、オースティンなどを読破し、暇さえあればダーウィンの『種の起源』を読みふけるようになったのである。

『ラークライズ』の美質は、こうした独学に基づく、学問的な客観性に貫かれた、社会史家の視点にある。自伝でありながら自己顕示欲とは無縁で、しかしだからこそ自分という個人の位置が的確に適切に、テキストの中で把握され配置されて、社会におけるその意味と意義が等身大に表現されている。これはまさしくプロの書き手の姿勢であり技量であるといえる。

しかし続編の『キャンドルフォードへ』、『キャンドルフォード・グリーン』では、慎重だった筆運びが、流れるような語り口に変わっていく。と同時に、背景の一部として後退していた主人公の姿が、次第にテキストの中心を占めて、その生き方そのものがテーマとしてクローズアップされてくる。そして三部作の結末では、ローラは自分の人生を自分で選択し、キャンドルフォードからも出ていく。「彼女の姿は田舎の風景から消えていった‥‥彼女が生まれた土地で、もう一度風景の一部になることはなかった」(480)と表現されている通り、ここには、故郷を愛しつつも、その生育環境に自己を埋没させることなく、職業婦人として自立するモダン・ガールの旅立ちが描かれている。キャンドルフォードでの勤務経験・生活経験は、それを可能にするための訓練・研修として機能していたのだと、読者は最後になって気づかされることになる。

そうした飛翔がじつは作者／主人公の所期の目的ないし願望であったことが、さらにさかのぼって三部作の出発点、『ラークライズ』の書名に、すでに表現されている。モデルとなった実在の村の名は「ジャニパーヒル」(Juniper Hill)「柏槙（びゃくしん）の丘」で、その地に生える樹木の名を冠しているが、これを上書きした架空の地名「ラークライズ」(Lark Rise)とは、「雲雀（ひばり）の丘」、すなわち、ヒバリが空高く舞い上がり、美声を冴え渡らせる丘のことである。

この名にイギリス人が当然のごとく連想するのは、ヴィクトリア朝を代表する詩人、ロバート・ブラウニング(Robert Browning, 1812-89)の「ピパの唄」(“Pippa’s Song”, 1841)である。

The year’s at the spring
And day’s at the morn;

Morning's at seven;
The hill-side's dew-pearled;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn;
God's in his heaven—
All's right with the world!

時は春、
日は朝（あした）、
朝は七時（ななとき）、
片岡に露みちて、
揚雲雀（あげひばり）なのりいで、
蝸牛（かたつむり）枝に這ひ、
神、そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。

上掲の、上田敏(1874-1916)の名訳「春の朝」(『海潮音』(1905)収録）として日本でも知られたこの詩は、キリスト教・封建主義・帝国主義の世界観を礼賛し、社会の階層構造を追認している。注目すべきは、「ラークライズ」という名が、こうした保守的な旧来の世界観との調和を想起させつつも、「ヒバリが歌声を響かせる」すなわち「女性が声を上げる、自己を表現する、自分を主張する」という新たな世の趨勢をも感知させるところである。

『ラークライズ』から『キャンドルフォードへ』、『キャンドルフォード・グリーン』への、3 作にわたる物語の展開は、その語り口の変化そのものが実演しているように、ローラが職業作家としての声を獲得し、磨き上げていく道のりの記録でもあった。「キャンドルフォード（Candleford）とは、その自己実現の道を照らすロウソクの灯り(candle)の地(ford)だったのだ。

現実のフローラは、このあと都会の郵便局へ転任していくのだが、作中のローラは「広い世界を見たい」(480)と言うのみで、具体的な進路は一切書かれていない。この、ある種のオープン・エンディングは、この時代の女性の職業婦人としての選択肢を限定せず、可能な限り自由にしておくための空白であるとも受け取れる。どんな空へも、飛んでいけるように。

作者の 60 代に執筆されたにもかかわらず、この第 3 作の結末では、そのようなモダン・ガールの未来への希望が、ある種の歴史的現在として、みずみずしいリアルタイムの輝きのままに保存されている。

その一方で、第 1 作の最後は、後年の弟の戦死の言及であっけなく幕が下りる。この時代の後日談を知ってしまっている老境のフローラは、その後イギリスが突入することになる戦争の影を、ここに落とさずにはいられない。自分と社会の過去を回顧する際の批評性が、そこには加えられている。

故郷での子ども時代を共有した最愛の弟エドモンドは、第 1 次世界大戦の激戦地イーペルで戦死している。だが作者は、その詳細は何も語らない。ただ、こう告げるのみ。

戦うことを求められたとき、村の若者たちはひるまなかった。ラークライズの人間で意地と勇気のないものはいない。そしてその結果、こんな小さな村で、十一人もの若者が帰って来なか

ったのだ。昔、教会のローラたちが座っていた席の前の壁に、彼らの名前が彫られた真鍮のプレートがかかっている。そこには五人ずつ左右二列に十人の名と、下に一人、エドモンドの名前が彫られている。(397-398)

物語を唐突に終わらせる、まるでギロチンのような、この素っ気ない語りには、すべての思い出を容赦なく断ち切る戦争の残酷さが体現されている。

この 3 部作が執筆されたのは、時まさに第 2 次世界大戦の真っ最中。弟の戦死の 2 年後に生まれた次男が、育ち上がった末に、今回の大戦でやはり戦死する。作品を取り巻く二つの大戦での家族の悲劇は、作品世界の輝きを悲痛なまでに引き立たせるとともに、家族の歴史を作品に定着する使命感を、同様の経験をした国民の代表としても、より切実なものにしたであろうことは想像に難くない。

ここで見落としてはならないのは、悲嘆や感傷を削ぎ落とした上掲の引用が放つ、強烈な矜持である。戦死者の名を刻んだ銘板は、危機に瀕した国のために村が捧げた命の記録、そして、この小村が国家を支えた証拠として、いまも残り、燦然と輝きを放つ。これを誇り高く巻末に掲げた本書は、その表題とあいまって、まぎれもなく「ラークライズ」という村の名を歴史に残す、もうひとつの銘板なのだ。

このようにフローラの自伝は、実体験から執筆までの長い年月の隔たりにより、歴史の証人である当事者の実感に、歴史家としての観察眼・批評眼が加わって、叙述のスケールも深みもキレも増し、近代化するイギリスの村社会の自伝にも、なりおおせているのである。[6]

3-2 ノエル・ストレトフィールド

労働者階級出身のフローラの自伝が、学問的素養と平静で慎重な性格の結晶であったのに対し、中産階級出身のノエル・ストレトフィールド(Noel Streatfeild)の自伝は、舞台経験と大胆で突発的な性格が招く事件帖の観がある。

『シューズ』シリーズ(*Shoes* series, 1936-62)の作者で、職業小説の創始者[7]となり、カーネギー賞を受賞、大英帝国勲章(OBE)も授与され、イギリス児童文学の大御所に収まったこの作家が、牧師の次女に生まれて可愛がられずに鬱屈し、[8]生家を飛び出して女優となり、やがて文筆業で名を成すまでが、晩年の 3 部作、『牧師館の家族』(*A Vicarage Family*, 1963)、『牧師館を離れて』(*Away from the Vicarage*, 1965)、『牧師館を越えて』(*Beyond the Vicarage*, 1971)で回想されている。それはいわば、女性職業作家のメイキング・ノベルなのである。

女優時代のノエルは、職業柄、不規則で奔放な生活ぶりと最先端のファッションが、当時のいわゆる軽佻浮薄で流行を追う「モダン・ガール」そのものに見える。同時代の世間が「ブライト・ヤング・ピープル」(Bright Young People)[9]と、いかにもイギリス人らしい控え目な物言いで、しかし眉をひそめて呼んだ、そしていまの日本人なら「パリピ」(パーティー・ピープル)と呼びそうな娘っ子である。

しかし演劇界での体験と見聞の蓄積は、創作の題材となり、のちに豊かに花開く。家庭的・経済的に困窮する少女たちが職業教育を受けて舞台女優、映画スター、バレリーナ、アクロバット芸人、スケーターなど、プロの職業人として自立していく姿を描く『シューズ』シリーズは、いってみればどれも、ノエルの自伝のバリエーションである。そしてそのきわめつけ、作家本人が主人公の『牧師館』3 部作は、ノエル自身が狭義のお軽い「モダン・ガール」[10]から、本論で示す広義の、もしくは発展型の「モダン・ガール」、すなわち、まず自分の足で立ち、やがては国をも

支えていく「新しい時代の職業婦人」へと、成長し変容していく過程を、ついに蔵出しした作品なのである。

姉と妹は美少女ながら、自分は器量に恵まれず、「牧師先生のお宅のあのぱっとしないお嬢ちゃん」(I 9)と世間に呼ばれ、家庭でもつまはじきにされる主人公ヴィッキー（ノエル）は、体制への反抗心から、あえて学業に精励せず、その結果、終生、文法が苦手となる。

時として現れる、長すぎる込み入った文、屈折の多い複文・重文、誤りも紛れこんでいる文。読みにくいのに不思議と心つかまれ、迷宮さながらに道筋をたどることをいざなう文。もつれた言葉から意味をさぐり出し、ひとすじの道を見つけ出す感覚。心の乱れと葛藤をそのまま映し出すかのようなヴィッキーの文体は、当代流行の技法である「意識の流れ」の影響もあるにせよ、なにより、彼女の人生行路の模索をそのまま実演している。少女時代の逆境は、ノーベル賞作家ゴールズワジー(John Galsworthy, 1867-1933)が「直そうとしないで、そのまま出版するように」(III 46)と忠告する、かけがえのない文学的個性に結実するのだ。[11]

周囲への怒りと反発は、途方もない企画力と行動力にも転化する。学校では独自に文芸雑誌を発行し、ひとりで編集長・寄稿者・購読料集金係を兼務。教師がその雑誌を破り捨てると、抗議プロジェクトとして、生徒がこの教師に丁寧な態度をとるたびに各自の持ち点 100 点から 1 点ずつ減点、というポイント制度のグレーリボン協会なるものを設立。それが露見し退学処分となる。家を出て女優になるのも突飛だが、南アフリカへ公演に行き、向こうを拠点にするのも破天荒。しかし父の急逝後、一家はこの次女の実務能力に頼りきりとなる。家からはじかれた苦境がヴィッキーの独立心と企業心を培い、皮肉なことに実家の危機を救うのである。

そうは言っても、しょせんは世間知らずのお嬢さんゆえ、思わぬ陥穽にもはまる。劇団に通い始めたころに住んだ宿で、ここの娘たちは何回言っても戸締りがだらしない、と不満に思っていたら、下宿ではなく売春宿に部屋を借りていたことが判明したり、南アフリカ巡業中に体調を崩して療養していたら、知らないうちにデマが出回り、同じ劇団の俳優が自分をめぐる恋愛沙汰で落命したことになっていたり。額面通りなら、まさにその頃の軽いモダン・ガールらしい浮ついた所業だが、現実がそれとはズレていることで、かえってそれとの距離が目立つ。スキャンダルにまみれても、ヴィッキーは結局、彼女の才能に気づいた他の女優の勧めに従い、作家への道を地味に、かつ勇敢に歩みだして、自立した真のモダン・ガールに向かうのだから。

その道は、第 2 次世界大戦に突入して、さらに国を支える道へと続く。ヴィッキーは婦人義勇隊(Women's Voluntary Service)に加わり、移動売店(canteen)[12]の担当として、避難所の食糧配給、空襲の際の炊き出し、さらには人探しにまで奔走する。農村では婦人農耕部隊(Women's Land Army)隊員、通称ランド・ガール(land girl)[13]に志願した若い女性たちが都会から農場にやってきて農作業に従事し、食糧増産の担い手となる。WVS と WLA は、銃後の労働奉仕で国家に献身するイギリス女性たちが所属する、誇らかな二つの軍隊だった。

ヴィッキーがそのように「戦い」に身を投じるのは、唐突でも意外でもなかった。ヴィッキーと文学への興味を共有し、ヴィッキーの女性としての魅力にも惹かれ始めていた[14]唯一の理解者、いとこのジョンは、第 1 次世界大戦で戦死する。ジョンを失ったことで突然に自分は大人になったのだ、と覚醒するシーンで、3 部作の第 1 巻は終わっている。子ども時代に別れを告げ、家族のいた牧師館から「離れて」、それを「越えて」いくことが、ヴィッキーの使命となる。こうしていま、自分なりに国を支えることで、ヴィッキーは自分の使命をジョンの使命と重ねるのである。

作家として成功すると、ヴィッキーはまずメイドを雇い、次には秘書を雇う。そうして終生、独身を通す。戦争によって果たされなかったジョンとの結婚[15]は、女性としての生涯にわたる完

全な自立、という形に着地した、とも言えよう。

ローラの自伝が、自分の周囲のものを静かに受けとめてつづられていたのに対し、ヴィッキーの自伝は、自分の周囲のものへの叩きつけるような苛立ちに満ちている。しかしそれが好一対で、女性の目に映る社会の姿、社会に生きる女性の姿を、陰画と陽画で見せてくれる観がある。これほどまでに対照的な二つが、戦争については心を揃えているところには、女性の自立の完成形が「国家に寄与する存在」となる、イギリス人のシチズンシップ・市民精神・公共心の強靭さを、見ることができるだろう。

４．結

メイドとモダン・ガールの自伝が示す、女性の職業作家への道には、多くの共通点が見られる。「働く娘」が「書く女性」として自立するに至るには、教育に比較的理解のある家庭環境、高い向学心を持つ本人の資質、執筆したものが世に出ることになる時の運と人の縁、といった要素も少なからず作用している。しかし彼女たちの成功は、なによりも、そこに必要な二つの条件を満たしていたからであると考えられる。

一つめは、日々の労働にいそしむ心と習慣である。どのような作風であれ、執筆とは、毎日一定の時間を費やして一定の量を少しずつ書き進める、地道な作業の継続にほかならない。その遅々たる営みを着実に積み重ねていくことを厭わない心性が、目の前の用事をひとつずつ丁寧に辛抱強くこなす労働によって獲得されていたことは、大きな強みであったといえる。[16]

二つめは、労働によって自分の役目を果たすことは、他人の役に立つことであり、自分の所属する全体の存立に利することである、という自覚・責任感・使命感である。メイドの労役が家庭を回すのはもちろん、郵便局員の業務は社会に情報を回し、役者の演技は劇を動かす。戦時中には、女性が家の中と外でどう働くかが、国家の存続にまで影響した。そのように、みずからの職分が社会システム全体に関わる、という視野と誇りがあってこそ、ほかに誰も書かない自分の人生を書くことで、その視点でしか見えてこない国の姿を歴史に残す、という彼女たちの自伝の書き甲斐と魅力が、生まれているのである。

メイドとモダン・ガールの行き着く「大義のために、小事に身をやつす」この職業婦人像が、じつは 20 世紀前半から中葉にかけてのイギリス女性の理想像であったことが、児童文学のヒロインの人物像に表れている。

たとえばバーネット(Frances Hodgson Burnett, 1849-1924)の名作『小公女』(*A Little Princess,* 1905)の主人公セーラは、インドで暮らす父と離れてイギリスの寄宿学校に入るが、父の事業の失敗と死により、学校一のお嬢様から下働きに転落する。いまや孤児のセーラは、心はいつも王女さまのつもりでいること、そして川端(2006)が指摘するように「幾度も自分を兵隊さんになぞらえる」(109)ことで、校長の虐待に耐え、ほかの恵まれない境遇の子どもたちのために力を尽くす。

またエドワード・アーディゾーニ(Edward Ardizzone, 1900-79)の海洋少年冒険絵本『チム』シリーズ(*Tim* series, 1936-77)に登場するルーシーとシャーロットは、ともに裕福な後見人のお屋敷で暮らす孤児で、上流階級に属しながら、チムと知り合うや家事に目覚め、繕い物、料理、洗濯、傷病人の世話をなによりの喜びとして、チムが船や灯台や学校で繰り広げる海賊や暴漢や級友たちとの戦いに同道し、大きな力となる。

このように「家事をすることによって戦う」上流の少女たちの表象は、階級を越えて普遍的に、女性の家事労働と社会の危機管理が一体であること、家事は国事であることを刻印するイコンと

なっている。

そして、本論で取り上げた女性自伝作家たちにとっては、書くこともまた国事であったのだ。それぞれの労働に従事した一生を語る回顧録は、彼女たちがイギリス社会の浮き沈みに従軍した戦記である。60 歳を過ぎて自伝を書くということは、みずからが生きた人生と社会の総括をすることであり、自他に対する最後のお勤めであった。仕事納めとして後世に託されたその自叙伝はどれも、市井の女性の視点から編まれた国家の年代記でもあって、書くことと働くことの深いつながりから生まれる、慎ましくも貴い光を紙背から放ち、国民の未来を照らし続ける国家遺産なのである。

注

1. 19 世紀末から 20 世紀初頭の英米で一世を風靡した理想の女性像、長身で細身で優美な「ギブソン・ガール」(Gibson girl)のモデルとなった、画家デイナ・ギブソンの妻アイリーンは、レディ・アスターの実姉。
2. ヨークシャー州民の単刀直入で無遠慮な表現形式と、それを支える質実剛健で頑迷な農民気質の詳細については、Waites(1993)および武田(2019)を参照のこと。
3. 池上(2006)は、洗濯メイドは専門的な技術を要するため仕事に誇りを持っていたことを指摘しており(108)、ホーン(2005)は、洗濯メイドに勤勉で良心的であることを要求した女主人もいたことを紹介している(115)。メイドの中でも格が上であるこの職種に就いていたために、ローズの母親は知的な意識が高く、娘の出世の戦略を練るだけの情報収集能力や計画性に長けていた、と推測される。
4. 匿名性を志向したのであろうこの名は、しかしながら、アメリカ開拓時代の生活を描いたローラ・インガルス・ワイルダー(Laura Ingalls Wilder, 1867-1957)の名と、はからずも符合し、石田(2008)が指摘するように、ヴィクトリア時代の田舎を描いた「イギリスのローラ」(401)というステータスを得ることになる。
5. 博物学の視点が創作に生かされて女性作家を生み出した先例には、『ピーター・ラビットのおはなし』(*The Tale of Peter Rabbit*, 1902)のビアトリクス・ポター(Beatrix Potter, 1866-1943)がいる。
6. 作中でローラがジプシーの占い師に言われた、「おまえは将来愛される人間になる‥‥会ったこともない人間に愛され、会うこともない人間に愛されるだろう」(380)というお告げは、職業作家としての成功を予言していたと解釈できる。事実、いったんこの作品を読んだら、引っ込み思案で不器用で、しかし、まっすぐで優しい心を持ち、こまやかにゆきとどく目で、ささやかでもこの上なくいとおしい日常の物語をつづる、この作者／主人公を、読者は愛さずにはいられないのである。
7. イギリス職業小説ジャンルにおけるストレトフィールドの位置づけについては、武田(2021)を参照のこと。
8. ストレトフィールドの少女小説における「次女」の分析については、武田(2022)を参照のこと。
9. 「ブライト・ヤング・ピープル」の詳細な分析については、高田(2022)を参照のこと。
10. 「モダン・ガール」という形象のありようについては、松本(2008)の議論も興味深い。
11. ゴールズワジーはノエルに、出版先としてハイネマン社(Heinnemen)も紹介してくれる。出口(1986)が指摘するように、ハイネマン社は新しい作家を獲得するのが巧みで(197)、当時の新人の登竜門となっていた。
12. Davis(1993)は、移動売店の仕事が、いつ爆撃機が来襲するかもしれない時にも屋外にいなくてはならない、危険な任務であったことを指摘している(206)。Patten(1995)は、WVS が各地の婦人会などと並んで、戦勝記念日を祝う素晴らしい理由がある(51)と述べ、戦時中の女性の労働奉仕の意義を称揚している。
13. Patten(1995)は、ランド・ガールたちが農業経験もないのに重労働に耐えて戦時中の男手不足を補い、多くが戦後も農場にとどまったことを賞賛している(91)。一方 Davis(1993)は、ランド・ガールの制服が魅力的だったことを指摘し(84)、志願の動機におしゃれな娘心があったことをほのめかしている。映画『スカートの翼ひろげて』(*The Land Girls,* 1998)は、階級も事情も異なる 3 人のランド・ガールのそれぞれのドラマを描き、

日本でも劇場公開されて話題となった。

14. イギリスでは、いとことの結婚は法律上可能であり、珍しくない。ダーウィンと妻のエマも、また『くまのプーさん』(*Winnie-the-Pooh*, 1926)の作者 A・A・ミルン(A. A. Milne, 1882-1956)の息子、クリストファー・ロビンと妻のレズリーも、いとこ同士だった。

15. ヒラリー・マッカイ(Hilary MaKay,1959-)の『ルーパートのいた夏』(*The Skylark's War*, 2018)は「孤独な少女を輝く笑顔で救った年上のいとこが第 1 次世界大戦に出征し、紆余曲折を経て、最後は少女のもとに戻る」というストーリー。ストレトフィールドの三部作とぴったり重なる設定に、結末をひっくり返したリベンジ編とも読めて、比較すると、最愛のいとこと再会する結末が、ますますせつない読後感を残す。

16. 平時の淡々とした態度をいかなる緊急時にも乱さず、ふだんのペースを守り抜くことは、イギリス人の行動の美学でもあり、軍事的にも最大の武器であったことが、ヒトラー上陸に備えて作成された政府のポスター、"Keep Calm and Carry On"に如実に表現されている。

参照文献

Ardizzone, Edward. *Tim and Lucy Go to Sea*. 1938; London: Frances Lincoln Children's Books, 2006.

---. *Tim and Charlotte*. 1951; London: Frances Lincoln Children's Books, 2006.

---. *Tim in Danger*. 1953; London: Frances Lincoln Children's Books, 2006.

---. *Tim to the Lighthouse*. 1968; London: Frances Lincoln Children's Books, 2007.

Mrs Beeton, *Mrs Beeton's Book of Household Management*. 1861. Abridged Edition. Ed. Nicola Humble. Oxford: Oxford University Press, 2000.

Burnett, Frances Hodgson. *A Little Princess*. 1905; London: HarperCollins, 1998.

Cannadine, David, ed. *Oxford Dictionary of National Biography*. <https://www.oxforddnb.com>

Crystal, David, ed. *The Cambridge Biographical Encyclopedia*. Oxford: Oxford University Press, 1998.

Davies, Jennifer. *The Wartime Kitchen and Garden: The Home Front 1939-45*. London: BBC Books, 1993.

Darwin, Charles. *The Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*. 1859; London: Penguin Books, 1968.

Ebury Press, comp. *Keep Calm and Carry On: Good Advice for Hard Times*. London: Ebury Press, 2009.

---. *Keep Calm for Chaps: Good Advice for Hard Times*. London: Ebury Press, 2011.

---. *Keep Calm for Ladies: Good Advice for Hard Times*. London: Ebury Press, 2011.

---. *Keep Calm at Christmas: Good Advice for Christmas Time*. London: Ebury Press, 2011.

"Flora Thompson." Wikipedia. 13 June 2022. ＜https://en.wikipedia.org/wiki/Flora_Thompson＞

Harrison, Rosina. *The Lady's Maid: My Life in Service*. 1975; London: Ebury Press, 2011.

---. *Gentlemen's Gentlemen: From Boot Boys to Butlers, True Stories of Life below Stairs*. 1976; London: Sphere Books, 2015.

"Life stories and oral history collection." The Museum of London. 13 June 2022. ＜https://www.museumoflondon.org.uk/collections/about-our-collections/what-we-collect/life-stories-and-oral-history-collection＞

Marlow, Sylvia. *Winifred: A Wiltshire Working Girl*. Bradford-on-Avon: Ex Libris Press, 1991.

McKay, Hilary. *The Skylarks' War*. New York: Margaret K. McElderry Books, 2018.
Merriman, Nick, ed. *The Peopling of London: Fifteen Thousand Years of Settlement from Overseas*. London: The Museum of London, 1993.
Mullins, Samuel and Gareth Griffiths. *Cap and Apron: An Oral History of Domestic Service in the Shires, 1880-1950*. Leicester: Leicestershire Museums, Arts and Records Service, 1986.
Patch, Harry, and Richard van Emden. *The Last Fighting Tommy: The Life of Harry Patch, the Only Surviving Veteran of the Trenches*. 2007; London: Bloomsbury Publishing, 2008.
Patten, Marguerite, O. B. E. *The Victory Cookbook*. London: Hamlyn, 1995.
Potter, Beatrix. *The World of Peter Rabbit Box One: The Original Tales 1-12*. London: Frederick Warne & Co., 2002.
---. *The World of Peter Rabbit Box Two: The Original Tales 13-23*. London: Frederick Warne & Co., 2002.
Powell, Margaret. *Below Stairs: The Bestselling Memoirs of a 1920s Kitchen Maid*. 1968; London: Pan Macmillan, 2011.
Streatfeild, Noel. *A Vicarage Family*. 1963; London: Puffin, 2016.
---. *Away from the Vicarage*. London: Collins, 1965.
---. *Beyond the Vicarage*. London: Collins, 1971.
Thompson, Flora Jane. *Lark Rise*. 1939; Charleston: Createspace Independent Publishing Platform, 2015.
---. *Lark Rise to Candleford*. 1945; Boston: David R. Godine, Publisher, 2008.
Waites, Brian. *Tykes, Dumplings and Scrumpy Jacks*. Cheltenham: Evergreen, 1993.
アーディゾーニ、エドワード。『チムとルーシーとかいぞく』。なかがわ ちひろ・訳。東京：福音館書店、2001。
---。『チムとシャーロット』。なかがわ ちひろ・訳。東京：福音館書店、2001。
---。『チムききいっぱつ』。なかがわ ちひろ・訳。東京：福音館書店、2001。
---。『チムとうだいをまもる』。なかがわ ちひろ・訳。東京：福音館書店、2001。
新井潤美。『執事とメイドの裏表――イギリス文化における使用人のイメージ――』。東京：白水社、2011。
---。「解説　カントリー・ハウスの盛衰が生んだドラマ」。ハリソン、2014。355-362。
池上良太。『図解　メイド』。東京：新紀元社、2006。
石田英子。「訳者あとがき　ラークライズへの旅」。トンプソン、2008。399-411。
上田敏。『海潮音　上田敏訳詩集』。新潮文庫。東京：新潮社、1952。
川端有子。『少女小説から世界が見える　ペリーヌはなぜ英語が話せたか』。東京：河出書房新社、2006。
クリスタル、デイヴィッド・編。『岩波＝ケンブリッジ世界人名辞典』。金子雄司、富山太佳夫、渡部ちあき、他・編訳。東京：岩波書店、1997。
ストレトフィールド、ノエル。『ビクトリアの青春』。野々瀬協子、新田由香子・訳。東京：すぐ書房、2003。
高田秀和、大道千穂、井川ちとせ、大田信良・編著。『ブライト・ヤング・ピープルと保守的モダニティ　英国モダニズムの延命』。東京：小鳥遊書房、2022。
武田ちあき。「ジャーベイズ・フィンの学校小説における教職観――その社会的・時代的・地域的

な意味――」、『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第 68 巻、第 2 号、2019。367-388。
---。「イギリス児童文学における職業教育の諸相――『ハリー・ポッター』とそのルーツ――」、『埼玉大学国語教育論叢』第 24 号（埼玉大学国語教育学会）、2021。1-13。
---。「次女の本懐――ノエル・ストレトフィールドの少女小説と二番手の時代――」、『埼玉大学国語教育論叢』第 25 号（埼玉大学国語教育学会）、2022。1-13。
出口保夫。『イギリス文芸出版史』。東京：研究社出版、1986。
トンプソン、フローラ。『ラークライズ』。石田英子・訳。東京：朔北社、2008。
---。『キャンドルフォード　続・ラークライズ』。石田英子・訳。東京：朔北社、2021。
パウエル、マーガレット。『英国メイド　マーガレットの回想』。村上リコ・訳。東京：河出書房新社、2011。
ハリソン、ロジーナ。『おだまり、ローズ――子爵夫人付きメイドの回想』。新井潤美・監修。新井雅代・訳。東京：白水社、2014。
---。『わたしはこうして執事になった』。新井潤美・監修。新井雅代・訳。東京：白水社、2016。
ブラウニング、ロバート。『対訳　ブラウニング詩集――イギリス詩人選〈6〉』。富士川義之・編。岩波文庫。東京：岩波書店、2005。
ホーン、パメラ。『ヴィクトリアン・サーヴァント――階下の世界――』。子安雅博・訳。東京：英宝社、2005。
マッカイ、ヒラリー。『ルーパートのいた夏』。冨永星・訳。東京：徳間書店、2020。
松本朗。「三冊の「モダンガール小説」――〈新しい女〉小説の帝国的展開／転回――」、『転回するモダン――イギリス戦間期の文化と文学――』。遠藤不比人、他・編。東京：研究社、2008。265-285。
マーロウ、シルヴィア。『イギリスのある女中の生涯』。徳岡孝夫・訳。東京：草思社、1994。
村上リコ。『図説　英国メイドの日常』。東京：河出書房新社、2011。
『スカートの翼ひろげて』。デヴィッド・リーランド・監督。キャサリン・マコーマック、レイチェル・ワイズ、アンナ・フリエル・出演。1998。DVD。アミューズ・ビデオ、2000。

（2023年9月30日提出）
（2023年10月7日受理）

The Way to the Writer:
Maids and Modern Girls through WWI and WWII

TAKEDA, Chiaki
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper focuses on autobiographies of three maids and two modern girls: Winifred Grace, Margaret Powell, Rosina Harrison, Flora Thompson and Noel Streatfeild. Analysing the common factors that enabled these working girls to grow into professional writers, this study considers the social and historical significances of their achievements in literature. It is a curious coincidence that all their memoirs were penned or dictated at the ripe old age of more than sixty. Accordingly, their books retrospect to their personal lives and the nation's past from the late Victorian era to the early twentieth century suitably in a broader perspective and with a deeper insight. Vividly portraying their firsthand experiences in daily life, their narratives record precious observations of the changing status of working women in Britain. Their diligence and patience as domestic servants, a post office clerk and an actress result in their perseverance as authors; more importantly, their ethics in labour lead to their sense of duty to serve the country especially in times of crisis through WWI and WWII. Owing to this earnest and proud self-awareness as the basic and essential components of the system—of the household/mail/drama, and also of the empire—their autobiographies are elevated to the position of the unique chronicles of English society compiled from their modest standpoints, which should be duly regarded as the nation's legacy.

Keywords: maid, modern girl, autobiography, professional writer, WWI, WWII